

平成二四年 五月十一日印刷
〒 一一一―〇〇二二
台東区清川一―八―一
光 照 院 発 行
TEL〇三二八七二二八四八七

光 照 院 だ よ り

道 詠

われはただ

佛にいつか葵草

心のつまに

掛けぬ日ぞなき

法然上人

お袖をつかんで第一歩 たった一人も救えない私だけど

光照院副住職 吉 水 岳 彦

◆子どもの成長と出会い

先日、法話をさせていただくことになった滋賀県のお寺さまにお邪魔したときのこと。住職さまの幼いお子さんが、お母さんに連れられて私にあいさつに来てくれました。でも、はじめてみる私の顔に驚いたのか、泣いてお母さんの後ろに隠れてしまいました。何とか近くに来てほしくて、私はバルーンをふくらませてネズミを作り、その子に見せてみました。すると、左手でお母さんのお袖をつかんだまま、そつと右手を出して私の作ったバルーンのネズミを手に取ってくれました。

人見知りをはじめた幼いお子さんにとって、知らない大人との出会いは不安でいっぱいになる瞬間でしょう。そんなとき、お母さんはやさしい眼差しで子どもの手を取り、できるかぎり不安をやわらげながらその子を知らない大人の前に連れ出します。出会いは人にさまざまな学びをもたらす成長の端緒であればこそ、親はそつと背中に手をあてて、その子が一步をふみ出すのを待つのです。

もちろん、すべての出会いが良いものであるとは限りません。時に傷つけられることもあれば、出会いによって悲しみ、苦しむこともあります。しかし、傷つくことを恐れて出会いを避けてしまつたならば、癒されることも、安らぎを得ることも、希望を抱くこともありません。たくさん不安を抱えながらも、いろんな他者とかかわることが人の成長にとって必要なのです。そして、泣きべそをかきながらもかもしれないけれど、お母さんがそばについていてくれるから、子どももおそろおそろ袖をつかんで出会いの場に進み、成長への一步をふみ出すのです。まことに親というのはありがたいもので、新しい世界へふみ出す子どもをあたかな見守りのなかに育ててくださいます。

◆路上の人々との出会い

数年前から社会的に弱い立場にある方々の支縁をさせていただこうと、同じ志の仲間とともに「ひとさじの会」を設立し、さまざまな人々と出会わせていた

くようになりました。基本的には月に二回、東京都内におられるホームレス状態のおじさんたちに、ボランティアの方々と一緒に一個一合の大きなおにぎりーコンビニで売っているおにぎりの三倍以上の大きさーを作り、お茶や市販菓等を渡して歩きます。おじさんたちの中には、一週間以上食べていないと話す方もあれば、長い間人と話をしていなかったという方もいらつしやいます。活動では、一人ひとりに手渡ししながらいろいろなお話をうかがわせていただきます。

「オレ、九州以外のすべての新幹線の線路工事にかかわったんだ」「数年前まで、遠洋漁業にたずさわっていて、宮城の沿岸部に住んでいたんだ」「原発の仕事はキツイんだよな」などなど。実に

私たちが生活の中で日頃から恩恵を受けているものを造り、運び、働いてこられたが、病気やリストラといった理由で路上での生活にいたったということ話を話してくださいます。そして、たった一個のおにぎりをもらったことに對して、「ニコニコと」ありがとうと深々とお辞儀をされたり、「まだあそこにいる仲間がもらっていないと思うよ」と友人に取次いでくださったりします。

「ホームレス」というと何か「いけないことをしてきた人」「ダメな人」というレッテルを勝手に貼り、自分たちとは異なる存在ととらえて見て見ぬふりなんてことは、多くの方に経験があると思います。少なくとも私にはあります。大人たちが「あの人はちは怠けている人なのよ」と教え

てくれたとおりに、何の疑問も持たずに大人になりました。活動をはじめるとあたり、ホームレス状態のおじさんたちと接して感じたことは、どこにでもいる「普通の人たち」だということでした。当たり前のことなんです。でも、心のどこかに「この人たちは私とは違う」という気持ちがあつて接することができていなかったのです。話しているうちに、そうしたことが何ておかしなことなのかに気づかされたのでした。そして、「すべての人は平等である」と学びながら、実際には全然平等に人を見ることができていない自分がそこにいたのです。

◆平等の救いとは

法然さまが生涯をかけてお伝えになったお念佛のみ教えは、いかなる人にも平等に如来さまの

お慈悲が届いており、等しく救いにあずかることができるというものです。男であろうが女であろうが、頭がよかろうが悪かろうが、どのような仕事をしていようが、もって生まれた性格や過去の行いも一切問いただすことなく、ただその名前を呼んだものをあたかな救いの光明をもって照らしてくださいます。

私は念佛のみ教えに出会っていながら、法然さまの求められた「すべての人の平等の救い」をうわべでしか理解していなかったことを、ホームレス状態のおじさんたちとの出会いによって気づかせていただいたのでした。困難を抱えている人に寄り添うことはキレイごとではありません。そうしたなかで、平等の救いというもの人を人に説きながら、見て見ぬ

ふりをしてきた自分がいかに愚かであるか深く考えさせられました。

◆お袖をつかんで歩く

最期の時に極楽へ迎えとり、菩薩さまに生まれ変わらせてくださる如来さまの完全な救いと異なり、私たちの支縁はただおにぎりを一つ差し上げるというだけのきわめて小さなことです。とても目の前で苦しんでいるたった一人を救うこともかなわないでしょう。それどころか、路上に横たわるおじさん一人ひとりに等しく人としての敬意をもって接することすら満足にできていないかもしれません。活動をはじめから数年がたちましたが、自己のいたらなさを反省させられることばかり。これで良かったと思える活動など一度もありません。

自分が何もできないばかりに、路上で孤独のうちに亡くなってしまう方もあります。逃げ出してしまいたくなるような強い無常や無力感を感じることもありま

す。しかし、自坊の本尊さまの前に座ってお念佛を申すと、如来さまはただ静かに私の煩悶する心を聴いてくれます。苦しい胸の内を如来さまに聴いていただくことが、心の底からありがたく感ぜられるようになったのも、活動をはじめてからかもしれません。お念佛が終わったときには、法然さまはじめ、過去のお念佛者をお手本に、一つでも如来さまが喜びになられることをさせていた

い子どもがお袖をつかみながら知らない大人の前にでるように、今後も如来さまの慈悲のお袖をつかみながらさまざまな方々に出会い、お育てをいただきながら進んで参りたいと思うのです。

※これより寺報巻頭には、『ひかり』誌に連載される副住職の原稿を転載させていただきます。本当におぼつかない足どりですが、如来さまのお袖をつかんで一步をふみ出す副住職の気づかされたことや感じたことを綴らせていただきます。みなさま、どうぞよろしくお願い申し上げます。

合掌

《法然上人八百年大遠忌

お待ち受け法要の感想》

光照院檀信徒総代 高田 明

平成二三年に法然上人八百年大遠忌法要が執り行われます。法然上人の御影像分身が総本山知恩院より全国を巡回しており、光照院でも三月のお彼岸にお迎え

して、大勢のお檀家さま達と共に法要が厳肅に執り行われました。はじめてのことでしたが良い経験をさせていただきました。

読経を聞きながら、お念仏を称えながら少しでも社会に貢献し、一日一日を大事に過ごし頑張っていくことが、法然上人のみ教えに少しでも近づくことではないかと考えるようになりました。大きな声でお念仏を称えて、次の世極楽浄土に往き、先立った大切な人達にお会いできるのが楽しみです。

南無阿弥陀仏

光照院檀信徒総代 宮本健一

三月の春彼岸に光照院四〇〇年の歴史ではじめてという法然上人像のご分身をお迎えするお待ち受け法要が行われ、「お練り」には笙の音による先導で、袴に袴

という生まれて初めての姿で参加させていただきました。

本堂に到着いたしましたときには、檀信徒のみなさまが廊下には、檀信徒のみなさまが溢れるほど大勢みえており、彼岸回向、法話、念仏回向があり、さらに法然上人のご分身を白布でお拭いする「お身拭い」が行われ、檀信徒のみなさまと共に感謝の心を込めて拭わせていただきました。まことにありがたく慶びに堪えぬ思いでございました。

南無阿弥陀仏



袴に袴の姿でお練りに参加

《法然上人八百年大遠忌

お待ち受け法要の「報告》

当日は晴天に恵まれ、無事に法要を成満することができました。一五〇名近くの方に「ご参詣いただき、法然上人のお像も心なしか微笑まれていたようにみえました。念仏結縁符をお納めくださった方も一〇〇名を超え、本堂に盛大な法要を営むことができました。ご報告旁々御礼申し上げます。

合掌

《木魚のお話》 住職 吉水裕光

寺院には音を出す仏具がたくさんあります。並べてみれば、梵鐘（大鐘）・半鐘・大金・小金・鉦鼓・引磬・魚板・太鼓・木魚があり、なかでも割笏がよく用いられています。これらは時を知らせるために、もう一つは、読経や念佛の調子をそろえるために使われています。特に木魚や割笏は、複数の人が読経や念佛と一緒に称えてもまちまちにならないように、また、一定のリズムが保たれるようにするためであります。打ち方は二通りあります。「頭打ち」と「間打ち」です。浄土宗では読経や念佛の時に拍子を取るために文句の合間合間に打ちます。

精進が建前のお寺に「魚」がいるのは、不思議に思われる方

もございましょう。そこで木魚の名前のおこりについて申しますと、魚は昼夜を通して目を醒ましているので、私たちの怠惰な心を戒めて惰眠から目を醒ますためだといわれています。また一説には、お釈迦さまがインド各地に教えを弘めておられるときに、何千年も前から大きな川に住み着いた大魚がいて、川辺を通る村人や旅人に問答をし、かき、答えられないと食われてしまうという話を聞き、お釈迦さまはその大魚との問答に向かい、大魚を見事打ち負かしてしまいました。そこで、大魚の頭と尾っぽをくつつけてしまい、丸くせり出したお腹をみんなに打ちつけてもらうことにいままでの悪業が一つひとつ滅せられるように、大魚が畜生道を逃れられるように願いを込められたそうです。そして、私たちも念佛の時に使い、その戒めによってなまけ心を防ぎ、ご先祖へのご供養と阿弥陀さまの本願力を心から信じてお念佛にお励みください。

大勢でお称えするお念佛は一人の時と違って別の強さがあり、気持ち晴れ晴れしくなります。どうぞ声に出してお称え下さる

ことをお勧めいたします。合掌

日、浄土宗のお数珠について質問がありましたので、少し書かせていただきます。最近は一〇〇円ショップやキヨスクでも売られているお数珠ですが、これは仏さまを拝んだり、お念仏を称える際に使用する大切な仏具です。キリスト教のロザリオも、仏教の数珠に由来するものといわれており、それだけ古くから仏教者の間で用いられているものです。

浄土宗では、法然上人の教化を受けて生涯お念仏に励んだ陰陽師の阿波介（あわのすけ）が創りだしたと伝えられる二連の数珠を使い、お念仏を数えます。数珠玉の大きさにもよりますが、三万遍から六万遍のお念仏が数えられるようにできています。法然上人は「舞が必ず拍子にしたがうように、お念仏を申すときには必ずお念珠を練りながら称えましょう」と仰せになつておられます。数をかぞえることが大事なのではありませんが、数を目安に励むべきことをお示しくださっているのです。お恥ずかしい話ですが、僧侶

となるための修行中にお数珠に
 関して怒られた記憶があります。
 それは就寝前、はやく衣から作
 務衣に着替えようとして、つい
 つい数珠を畳の上に直接置いて
 しまったときのこと。「お数珠は
 自分の大切な人やご先祖さまの
 ことを仏さまにお願いする際に
 用いるものですから、もつと大
 切に扱いなさい」と、すかさず
 先輩僧から一言。

合掌

※最近、光照院でもお数珠をお
 わけすることになりました。
 お数珠等の収益は、すべて生
 活困窮者の支援団体へ、光照
 院檀信徒からのお布施として
 お送りしております。ご入り
 用の方はお寺へおまいるの際
 にお声かけください。

御仏具料寄進

- 為 瑞照院 四十三回忌
- 為 蓮光院 三十七回忌
- 一金参拾萬圓 施主川田幸男殿
- 為 壽教院 一周忌
- 一金参拾萬圓 施主小川公殿
- 為 専行浄福信士 三回忌
- 一金式拾萬圓 施主小澤みち殿

お知らせ

《光照院大施餓鬼会法要》

日程 六月一四日(日)

御齋(昼食) 一一時三〇分から

法話 一二時三〇分から

法要 一三時一五分

※法要の出欠と塔婆の申込、ご
 参詣の人数を同封のハガキ
 にて必ずお知らせください。

《孟蘭盆会ご回向のご案内》

本堂での御回向日時を定め
 ましたので、ご希望の方は六月
 末日までにご連絡いただけれ
 ば幸甚です。また、お塔婆をご
 希望の方は、この際に一緒にお
 申し付けください。

日時

七月十二日(日)

一一時、一三時、
一五時の三回

七月十三日(月)

一一時、一三時の二回

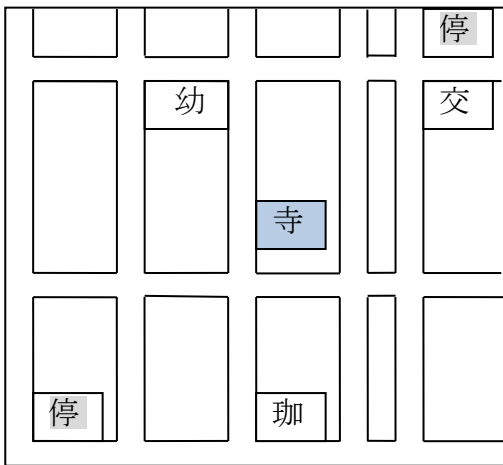
七月十四日(火)

一一時の一回

※お申込の場合は御位牌を必
 ずご持参ください。

《光照院へのアクセスについて》

これまで「浅草駅」から光照
 院そばの「今戸老人福祉会館
 前」まで運行していた台東区循
 環バス「北めぐりん」のバス停
 が移転しました。今後このバス
 をご利用になる場合は、九番
 「清川一丁目」停留所で降車く
 ださい。「甲42南千住ゆき」
 バスご利用の場合は、これまで
 通り「東浅草」停留所で降車く
 ださい。ちなみに、地図を示せ
 ば以下の通りです。図の上にあ
 る「停」が東浅草停留所、図の下の
 「停」が清川一丁目停留所です。



《光照院年中行事のご案内》

- 六月一〇日(日) 大施餓鬼会法要
- 七月一三〜一五日 お盆(新暦)
- 八月一三〜一六日 お盆(旧暦)
- 九月二〇〜二六日 秋彼岸
- 一一月八日(日) お十夜・放生会

どうぞみなさまお誘い合わせ
 の上、ご参詣ください。阿弥陀さ
 まや極楽の菩薩とられたご先
 祖さまたちのお見守りを受けて、
 健やかな毎日を送らせていただ
 けるようお願いいたします。

合掌